

館報 はた

スージーちゃん スイカ7くん

令和8年3月1日現在

世帯数	6,426戸
人口	14,998人
男	7,255人
女	7,743人

16区 上海渡の稲荷神社と しめ縄作り



16区の上海渡に稲荷神社という神社があります。この神社の正一位稲荷大明神、創建時期に関する資料・情報はないうこと、地区の高齢の方に話を聞いてみました。

話によると昔は御岳教の行者が管理をしており、行者がいなくなったため、上海渡地区の方々が管理を行い、現在の16区町会での管理に至ることです。



秋の例大祭では、新村から神主を呼んで社殿の中に10人程入って神事を行います。

以前は山車の運行をしておりましたが、山車に乗り太鼓を叩く小学生、笛を吹く青年・壮年会員等の担い手不足により、残念ながら現在は山車の運行は行っておりません。

上海渡稲荷神社等のしめ縄は、秋の例大祭前に青年・壮年の方々が、12月に公民館行事でしめ縄作りの講習を兼ねて作成し、以前のものと入れ替えて取り付けています。



しめ縄作りの稲わらは、前日にはせかけのわらをすくって綺麗にし、水をかけて湿らして準備しておきます。

大きなしめ縄は、一本ずつわらを足して振りながら麻紐を巻いて作り（わらを振る方向を間違えないように注意しながら）、三本出来たら、まず二本を振り、三本目は二本に巻き付けるように振ります。

神木等のしめ縄は、荒縄二本一組を三組作り、各二本一組を振りながら三組を合わせて振って作ります。

しめ縄に付けるごぼうは、数多くつくらなければならぬため人手が必要です。

そのため、ごぼう作りは講習を行いながら作成しています。

まずは、背景として使うニューサイラン（剣状の長い葉が特徴的）を格子状に編み込む作業がかります。（この下準備が今回の作品の一番のポイント）葉の長さや向きを考えながらホチキスを使って形を作っていきます。慣れた



暮れが押し迫る12月27日、毎年恒例の「お正月フラワーアレンジメント講習会」が開催されました。

講師の野村先生（「グリーンベル」の指導による講習会は好評であり、毎年多くの人に参加しています）

今年の花材は、松・椿・南天・葉牡丹・カーネーション・デンファレ・ニューサイラン、そしてお金が貯まるようにと先生提案のモチノキ等、色鮮やかです。先生が生けられた花をお手本に、説明を聞きながら参加者が生けていきます。



い作業でなかなか思うようにいかず、皆さん四苦八苦していました。続けて中心に使う紅白の葉牡丹の葉を一枚一枚丁寧に抜く、花器とのバランスを考えながら高低差をつけて挿していきます。葉を抜けることで葉牡丹の華やかさが増していきます。そして葉牡丹の周りにデンファレ・カーネーションと続け、他の花材を足元に挿して出来上がります。

皆さんが先生の説明を聞きながら熱心に取り組んでおり、時間を忘れていた様子でした。

ようやく出来上がった作品を参加者同士で見比べると、同じ花材を使ったのに仕上がった作品は様々で、生けた方の個性が光っていました。

講習会の終わりに年末の挨拶を交わし、完成させた作品を大事に持ち帰りました。

年末の慌ただしい時期でしたが、充実したひとときとなりました。

AIと紐解く24区のルーツ
「三溝の歴史を再発見」

生成AI技術の発達により「調べる」という行為はこの10年で劇的に変化しました。

かつては文献やウェブサイトを自力で探してまとめましたが、今ではAIが膨大な情報から答えを導きだしてくれます。私はここ24区で50年以上暮らしていますが、地域の歴史について知らないことばかりでした。そこで、AIを使って私たちの24区について調べてみました。

最初に、24区が属する三溝地区と波田地区の歴史です。

近年の発掘調査により、三溝地区では飛鳥時代から奈良時代の古墳が見つかっており、古くから人々が定住していたと考えられています。江戸時代には、三溝地区は「三溝村」と呼ばれ、松本藩領・島立組に属した比較的豊かな農村で、新田開発や農業技術の向上に力が注がれていたとAIは教えてくれました。

明治時代に入ると、上波多村・下波多村・三溝村の3村が合併して「波多村」が誕生しました。AIの情報によると、現在の「〇区」という自治会組織は、当時の3村がさ



AIで作成した江戸時代の24区のイメージ

らに細かく分かれていた「組」や「区」といった旧来の集落単位を基礎にしていると考えられ、24区は旧三溝村の一角にあっただと思われれるとのことです。

その後、昭和8年に村の平和と水田の豊かさを願って「波多村」から「波田村」へと改名されました。昭和48年の町制施行を経て、平成22年に松本市と合併し、現在の姿となったそうです。

最後に、AIを活用して24区の歩みを辿ってみると、私たちの暮らす地域が古代から続く古い歴史を持ち、江戸時代には松本藩の豊かな農村として発展してきたことに驚かされました。AIとの対話を通じて、見慣れた景色が少し違って見えるような、誇らし気気持ちになりました。

伝統繋ぐ
「おんべ売り」

1月11日、17区で伝統の「おんべ売り」が行われました。おんべは竹に色鮮やかな御幣を飾った縁起物です。



12月21日に児童と保護者が公民館へ集まり、竹のヤスリ

18区
三九郎

今年も地区の三九郎が、関係者の尽力により無事に行われました。朝は身にしみる寒さでしたが、やぐらに火が入ると大きな炎が立ち上がり、その暖かさとともに自然と人の輪が広がっていきました。久しぶりに顔を合わせる方々と新年のあいさつを交わしながら、地域行事の持つ力を改めて感じました。

一年の無病息災や家内安全を願うこの三九郎は昔から受け継がれてきた大切な行事で

がけから御幣の切り出しまで丁寧に行い、80本を丹精込めて手作りしました。

当日はお昼前から雪が舞う厳しい寒さでしたが、高学年の児童が2チームに分かれて元氣よく地域をまわりました。

「こんにちは！」という明るい声に、地域の方々からも「大きくなったね」と温かな声をいただき、世代を超えた地域の繋がりを肌で感じる一日となりました。

児童からは「次は自分から声を掛けたい」など、頼もしい感想が聞かれました。一方で少子化による担い手



不足や、材料となる竹の確保が難しくなるなど、この伝統を継承していくためには課題も浮き彫りとなりました。この大切な行事を次の世代へどう繋いでいくか、考える機会となりました。

す。火を囲みながら語り合う時間は、世代や立場を越えて人と人をつなげてくれます。

子どもの頃、三九郎はただの冬の行事でした。正月飾りを持っていけば炎が上がり、繭玉を焼いて食べられる、少し危険で少し特別な一日、そのくらいの認識でしたが、準備段階から当日の運営まで多くの方が陰で支えてくださっていることに改めて気付かされました。皆様には心から感謝申し上げます。

地域行事の継続が容易ではない時代になってきていますが、こうした行事を通じて顔

の見える関係を築くことは、今後ますます重要になると感じました。

三九郎の火に込められた願いとともにこの大切なつながりを守り、次の世代へ引き継いでいきたいと思います。

